環世界の文学とグリーンケア――ソロー、スナイダー、ハミッドの風景

塩田　弘　（広島修道大学）

発表要旨

15 世紀にヨーロッパで「線遠近法」が発明された後、人間は他の動物とは異なる独自の世界観を発展させてきた。それは、見る「主体」と見られる対象「客体」の二元論を前提として、人間中心の世界観を展開するものであった。一方、近年では、このような世界の見方とは異なる、それぞれの生物のものの見方・世界観を示す「環世界」(Umwelt)への理解と、人間の「自然のためのケアの倫理」(ethic of care for nature)の必要性も主張されている。

本発表では、(1)「線遠近法」に基づく世界観以外に、それとは異なる視点を獲得したソロー(Henry David Thoreau)の、動物への接し方と風景の捉え方を概観し、(2)ソローの思想を引き継いだスナイダー(Gary Snyder)の風景の捉え方、(3)モーシン・ハミッド(Mohsin Hamid)がコウモリへの共感とともに、新しいテクノロジーの発展によって固定された視点から開放され、新しい「扉」を獲得する様子について論じる。

キーワード

Anthropomorphism、the ethics of care、Umwelt

・Anthropomorphism「神人同型論」pathetic fallacy「感傷的虚偽」()

・the ethics of care 「ケアの倫理」→Carol Gilligan『もうひとつの声』(1982)

→「他人が必要としていることを感じたり、他人の世話を引き受けたりすることによって、女性は他人の声に注意を傾け、自分の判断に他人の視点を含み混んでいるのです」(22)

→フェミニズの倫理であった「ケアの倫理」を、Lawrence Buell は「心身二元論(mind-nature dualism)」が支配する世界で、“the ethics of care for nature”「自然に対するケアの倫理」(Buell 218)”の可能性を提示。

・Umwelt (環世界、ウンベルト)

Uexküll, Jakob Johann Baron von『生物から見た世界』(1934)

→生物学者ユクスキュル(1864～1944)が提唱した概念で、すべての生物は自身が持つ知覚によってのみ世界を理解し、すべての生物にとって世界は客観的な環境ではなく、生物各々が主体的に構築する独自の世界である。

※石井美保他編著『環世界の人文学――生と創造の探求』人文書院、2021 年。
京都大学人文科学研究所　共同研究「環世界の人文学」

図 1(左)　好奇心の森 DARWIN ROOM「環世界展――生物は世界をどう見ているか」2015 年
図 2(右)　落合陽一「環世界の遠近法――時間と空間、計算機自然と芸術」2021 年

引用

(1)【鈴木孝夫『世界を人間の目だけで見るのはもう止めよう』富山房インターナショナル 2019 年】

→・・・現在の私が最終的に到達したのは、世界を人間の目、人間の立場からだけ見るのはもう止めようということ。人間もあくまでも地球上の生物の一種にしかすぎないのであり、動物と我々は仲間なのです。そういう観点に立って他の動物の目で人間を見るとどう見えることか。(42)

(2)【ヴァンシアーヌ・デブレ「私たちのナラティブをテリトリーから放つ、鳥たちとともに」鵜飼哲編著『動物のまなざしのもとで―種と文化の境界を問い直す』勁草書房、2022 年】

→いまや、わたしたちのあいだで、世界によりよく住まうことを学ぶ(ないし学び直す）うえで、自分たちが別のナラティヴを必要としていること、また、そのナラティヴは単に人間のナラティヴに限られるべきでないことを確信するひとは数多くいます――ただ、そうしたナラティヴもわたしたちの言語に絡め取られていて、だからこそ、種を横断するナラティヴを作り出すという仕事は実にむずかしいのでもある。(273)

(3) 【Henry Beston, *The Outermost House: A Year of Life on the Great Beach of Cape Cod.* 1928. ヘンリー・ベストン『ケープコッドの海辺に暮らして――大いなる浜辺における一年間の生活』村上清敏訳、本の友社、1997 年】

We need another and a wiser and perhaps a more mystical concept of animals. Remote from universal nature, and living by complicated artifice, man in civilization surveys the creature through the glass of his knowledge and sees thereby a feather magnified and the whole image in distortion. We patronize them for their incompleteness, for their tragic fate of having taken form so far below ourselves. And therein we err, and greatly err. For the animal shall not be measured by man. In a world older and more complete than ours they move finished and complete, gifted with extensions of the senses we have lost or never attained, living by voices we shall never hear. They are not brethren, they are not underlings; they are other nations, caught with ourselves in the net of life and time, fellow prisoners of the splendor and travail of the earth.

私たちはより賢明な別の動物観、おそらくはより不思議に満ちた動物観を持つ必要がある。文明の中に生きる人間はあまねく広がる自然から隔絶され、複雑な人工物に囲まれて生活しているから、自らの知識という眼鏡を通して生き物を観察し、一枚の羽毛を拡大し、全体像を歪めて見ている。私たちは動物を不完全な生き物と思い、人間よりも劣ったかわいそうな生き物と見るから、動物をかわいがる。それが間違い、大変な間違いなのだ。人間の尺度で動物たちを判断してはならない。人間界よりも古くて完全な世界に住む動物たちは、完成した姿をしており、我々人間が失った感覚、もしくは獲得し得ない鋭敏な感覚を与えられて、我々には聞こえない声に従って生きている。彼らは人間の同類ではない。 人間の従属者なのではない。人間と同じく生と時間の網の目にとらわれているが、異なる国の住人なのだ。人間も動物とともに、この世の歓喜と苦悩の囚人なのだ。

(4)【ユクスキュル『動物の環境と内的世界』（1909 年、1921 年）】
→われわれの人間中心的な観察方法は、漸次背景に退き、それに代わって動物自身の立脚点のみが決定的なものとならねばならない。(13)

(5)【ユクスキュル『生物から見た世界』1934 年、1970 年】
→環世界は動物そのものと同様に多様であり、じつに豊かでじつに美しい新天地を自然の好きな人々に提供してくれるので、たとえそれがわれわれの肉眼ではなくわれわれの心の目を開いてくれるだけだとしても、その中を散策することは、おおいに報われることなのである。(8-7)

(6)【Donovan, Josephine. *The Aesthetics of Care: On the Literary Treatment of Animals*. Bloomsbury Academic, 2016】
→Decentering human perspective … is a first step toward relating to the 'other'—whether human or nonhuman nature—as a subject. (Atkinson 217).

(7) 【Buell, Lawrence. *The Environmental Imagination: Thoreau, Nature Writing, and the Formation of American Culture*. Harvard UP. 1995】
At it best, the ethics of care promises to quicken the sense of caring for nature and to help humans compensate for the legacy of mind-nature dualism while at the same time respecting nature's otherness. Clearly the rhetoric of nature's personhood does not always induce these results—no more than any system. (Buell 218)

(8)【伊勢田哲治『動物からの倫理学入門』2008】
・・・ケアの倫理とは、人間(とくに女性)が自然に持つ感情や態度としてのケアを、他の文

脈にまで拡張することで得られる倫理である。ケアという感情や態度が働いている状態の特徴としては、相手のことが気になって気になって仕方が無くなり、相手の立場からのものを見るという視点の変換が行われる。(287)

(9)【Francis H. Allen, ed. *Thoreau's Notes on Birds of New England*. Dover, 2019】

It was, indeed, as a describer rather than as an observer that Thoreau excelled. He never acquired much skill in the diagnosis of birds seen in the field. He never became in any respect an expert ornithologist, and some of the reasons are not far to seek. He was too intent on becoming an expert analogist, for one thing. It better suited his genius to trace some analogy between the soaring hawk and his own thoughts than to make a scientific study of the bird.(xi)

(10) 【Thoreau, *Walden*】(“Higher Laws”)

As for fowling, during the last years that I carried a gun my excuse was that I was studying ornithology, and sought only new or rare birds. But I confess that I am now inclined to think that there is a finer way of studying ornithology than this. It requires so much closer attention to the habits of the birds, that, if for that reason only, I have been willing to omit the gun. (211-12)

鳥撃ちについて言えば、銃を持っていた最後の何年間かは、鳥類学の研究を口実に、新種の、あるいはめずらしい鳥ばかり探し歩いた物だ。けれどもじつを言うと、いまではそれよりもずっとすぐれた鳥類学の研究方法があると考えるようになっている。それは鳥たちの習性の、より厳密な観察を必要とする方法なので、その点だけから言っても、私はよろこんで銃を手放そうと思ったのだ。

(11)伊藤詔子「アメリカン・ネイチャーライティングの起源を求めて」1996】

ソローは人間の歴史の中で観念のアレゴリーとなっていた動植物を元来の野生の中に解放し、「森の中でひっそりと自由に生きる」動物にむしろ自分をつか付けて文字どおり共に生きることを求めた。(41)

(12) 【Thoreau, *Walden*】(“Conclusion”)

The life in us is like the water in the river. It may rise this year higher than man has ever known it, and flood the parched uplands; even this may be the eventful year, which will drown out all our muskrats. (332)

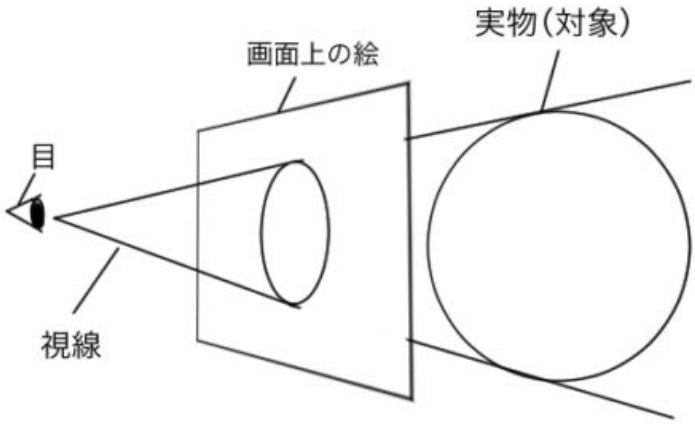
われわれの内なる生命は、川の水のようなものである。今年はかつて例を見ないほどの増水が起きて、乾燥した高地が水浸しになるかもしれない。そうなると、この辺のマスクらつとはみな溺死してしまうから、まことに多難な年ということになろう。

(13) 【Thoreau, *Walden*】(“Conclusion”)

Who knows what beautiful and winged life, whose egg has been buried for ages under many concentric layers of woodenness in the dead dry life of society, deposited at first in the alburnum of the green and living tree, which has been gradually converted into the semblance of its well-seasoned tomb—heard perchance gnawing out now for years by the astonished family of man, as they sat round the festive board—may unexpectedly come forth from amidst society's most trivial and handselled furniture, to enjoy its perfect summer life at last! (333)

この話を聞いて、復活と不死への信念が強くなったと感じない者がいるだろうか? たとえば、はじめはあおあおと生えていた木の、白い木質の部分に生みつけられた卵が、死んでひからびた社会生活のなかで、幾重にもとり囲む年輪に埋もれたまま歳月を経るうちに、その木は卵にとって、しだいによく乾いた墓標のようなものに変質してゆく。ところがここ数年のあいだは、外へ出ようとして木をかじる音が、楽しい食卓を囲んでいる人間の家族をおどろかすことになる。さて、いったいどんな美しい、羽のある生命が、世間のごくつまらない贈り物の家具のなかから不意にとび出して、その申し分ない夏の日々を楽しくすごすことになるであろうか!

図 3(左) パース（遠近法、透視図法）　図 4(右) “Transparent eyeball” as illustrated by Christopher Pearse Cranch, ca. 1836-1838



画像出典 https://souzoulog.com/2017/03/19/

(14) 【成田雅彦「エマソンと「透明」な大自然――「自然」に見る神秘主義的自然観の考察」『アメリカ』、1996】

→「見る意識」として、自らが神の一部となる恍惚と高揚が、ここには隅々まで行き渡っ

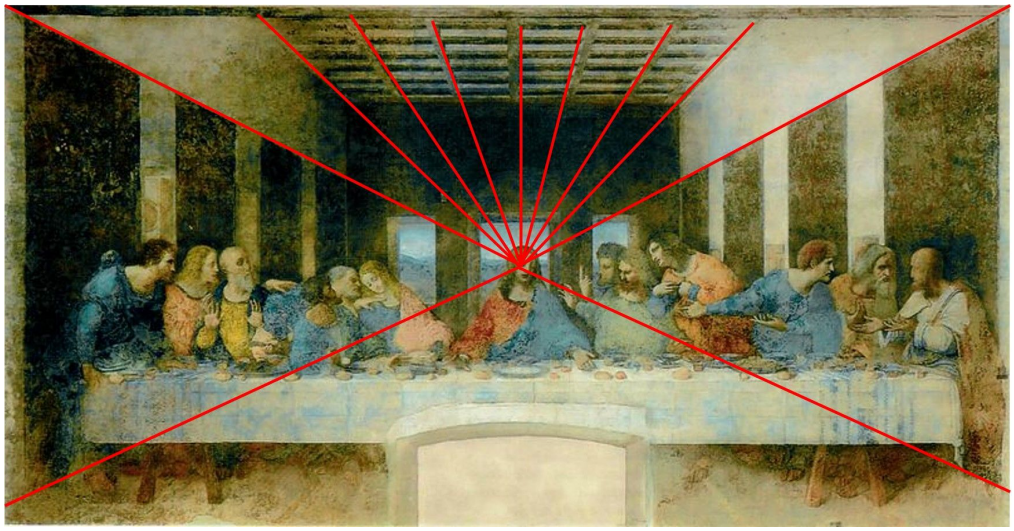
ている。しかし、興味深いことに、見ることに徹しながらも、エマソンの視線には現実の森がまったく映っていない。透明な眼球が見えているものは、実在の自然の背景にある精神、あるいは神であり、「自分の本性と同じくらい美しい、何か計り知れないもの」である。(136)

(15)【Thoreau, *Walden*. 】

What I have observed of the pond is no less true in ethics. It is the law of average. Such a rule of the two diameters not only guides us toward the sun in the system and the heart in man, but draw lines through the length and breadth of the aggregate of a man's particular daily behaviors and waves of life into his coves and inlets, and where they intersect will be the height or depth of his character. Perhaps we need only to know how his shores trend and his adjacent country or circumstances, to infer his depth and concealed bottom. (*Walden* 291)

僕が池について観察したことは倫理の領域でも当てはまる。それは平均値の法則である。二つの直径に関するその法則は、僕らを太陽系の中の太陽や人体の中の心臓のほうへ導いてくれるだけではない。ある個人の特定の日常的な振る舞いと生命の波動の全体に、いわば彼の入り江や瀬戸の中にまで縦横に線を引いてみよ。そうすれば、二つの線が交差する地点が、この人の品の高いところや深いところになる。彼の深みや隠れた水底を推測するには、彼の岸辺のたどる行方と彼に接し彼をめぐる領域とを知るだけでよいだろう。

図 5【レオナルド・ダ・ヴィンチ『最後の晩餐』1495-1498】



(16)レベッカ・ソルニット『ウォークス――歩くことの精神史』

→歩くことの理想とは、精神と肉体と世界が対話をはじめ、三者の奏でる音を響かせるような、そういった調和の状態だ。(14)

(17)レベッカ・ソルニット『ウォークス――歩くことの精神史』
→ソローその人は自然を詠う詩人であると同時に社会批評家だった。その市民的不服従、戦争と奴隷制を賄う納税を拒否したこと、その帰結として獄に繋がれて夜を過ごしたことは有名だが受動的で、土地を歩き回って風景を読み解いてゆくことと直接重なるわけではない。しかし、ソローは釈放されたその日にベリー摘みの遠足の先頭に立った。(18)

(18)【伊藤詔子「コミュニティ・エッジ・エピファニィ」『ユリイカ』1996 年 3 月号】
→「私は自分の中の鉱物、植物、動物のために戸外にいるのだ」(『ジャーナル』 ドーバー版 4:410）として一日の数時間を散歩に費やしたソローは、自然を自己の内部に感じるのみならず地球全体を一つの生命体と考えた。かつて人間が失った大地との一体性を取り戻そうとし「地球の外皮そのものを食べることが出来そうに感じ、自分を土的存在であり土と一体だと感じた」（「ジャーナル』 5:46）ソローは、自然との肉体的で強烈な接触の経験が五感の解放と融合を生み、自然に内在する霊的本質と野生を自らの思考システムに奪還する方法だと言う。(214)

(19) Thoreau, *Cape Cod*.
The reader will imagine us, all the while, steadily traversing that extensive plain in a direction a little north of east toward Nauset Beach, and reading under our umbrellas as we sailed, while it blowed hard with mingled mist and rain, as if we were approaching a fit anniversary of Mr. Treat's funeral. (*Cape Cod* 40)
読者の皆さんは、こうしている間も、私たちがその広大な平原を、霧雨混じりの烈風に吹かれつつ、やや北寄り東の方角にあるノーセット・ビーチ目指してひたすら歩き続けながら、こうもり傘の下で案内書を読んでいるものとご想像いただきたい。私たちはあたかもトリート師の忌日に巡り合わせ、これから記念行事に出席しようとしているかのようだった。

図 6“North-Eastern View of Provincetown, Mass”(Barber 49-9)

NORTH-EASTERN VIEW OF PROVINCETOWN, MASS.

The above shows the appearance of Provincetown as it is seen from the northeastern extremity of the village, which extends nearly two miles along the shore. The numerous windmills, and the elevations of sand, give this place a novel appearance.

(20) 【Snyder, Mountains and Rivers Without End, 】

Endless Streams and Mountains
(*Ch'i shan wu Chin*)

Clearing the mind and sliding in
　　to that created space,
a web of water streaming over rocks,
air misty but not raining,
　　seeing this land from a boat on a lake
　　or a broad slow river,
　　coasting by.
(*Mountains and Rivers Without End* 5)

「溪山無盡」(*Ch'i shan wu Chin*)
精神をとぎすませ、その創造された
　　空間に滑り込む
網のような水の流れが岩を覆っている
大気はかすんでいるが、雨は降っていない
　　湖上で、あるいは広大でゆるやかな流れの川から
　　舟に乗ってこの土地を眺める
　　岸に沿って流れに身をまかせながら。

図 7　"Streams and Mountains without End"『溪山無盡』1100–1150

China, late Northern Song dynasty (960-1127) – Jin dynasty (1115-1234) Handscroll, ink and slight color on silk

Image: 35.1 x 213 cm; Overall: 35.1 x 1103.8 cm https://www.clevelandart.org/art/1953.126

(21) 【Mohsin Hamid, *The Reluctant Fundamentalist,* 2007『コウモリの見た夢』武田ランダムハウスジャパン、2011 年】

Observe, Sir: bats have begun to appear in the air above this square. Creepy, you say? What a delightfully American expression—one I have not heard in many years! I do not find them creepy; indeed, I quite like them. Lahore was home to even larger creatures of the night back then—flying foxes, my father used to call them— and when we drove along Mall Road in the evenings we would see them hanging upside down from the canopies of the oldest trees. They are gone now; it is possible that, like butterflies and fireflies, they belonged to a *dreamier* world incompatible with the pollution and congestion of a modern metropolis. Today, one glimpses them only in the surrounding countryside.

But bats have survived here. They are successful urban dwellers, like you and I, swift enough to escape detection and canny enough to hunt among a crowd. I marvel at their ability to navigate the cityscape; no matter how close they come to these buildings, they are never involved in a collision. Butterflies, on the other hand, tend to splatter on the windshields of passing automobiles, and I have once seen a firefly bumping repeatedly against the window of a house, unable to comprehend the glass that barred its away. Maybe flying foxes lacked the radar—or the agility—of their smaller cousins and therefore hurtled to their deaths against Lahore's newer offices and plazas—structures that rose higher than any had before. If so, they would have long been extinct in New York—or even in Manila, for that matter!（71-72）

ごらんください。 広場の上空にコウモリたちが姿を見せています。 ぞっとするとおっしゃるんですか? 実に愉快なアメリカ英語的表現です。もう何年も耳にしていませんでしたよ! 僕はぞっとするとは思いません。実を言えば、コウモリたちがすごく好きなんです。見ていると若い頃のことを思い出します。祖父のプールで泳いでいると、よくコウモリたちが僕らをめがけて急降下してきました。たぶん僕らをカエルと勘違いしていたのでしょう。あの頃のラホールには、もっと大きな夜行性動物も棲息していました。夕方モール・ロードを車で走ると、オオコウモリ—祖父はそう呼んでいました——が大きな木々フライング・フォックス

の天蓋に広がる枝から逆さまにぶら下がっているのをよく見かけました。そういう動物は今では姿を消してしまいました。チョウやホタルもそうですけれど、彼らは近代的なメトロポリスの公害や渋滞とは相容れない、もっと夢のある世界に属していたんです。今では、郊外の田舎でわずかに見かけるだけです。

でも、コウモリたちはここラホールで生き延びました。彼らはあなたや僕と同じく、成功した都市居住者です。人目につかずにすばやく動けるし、群衆の中で狩りを行う狡猾さもあります。ラホールの街の中を悠々と飛び回る彼らの姿に僕は驚嘆します。ビルにギリギリまで近づいても、衝突することは絶対にありません。一方、チョウは行き交う車のフロントガラスにぶつかることもよくありますし、ホタルが人家の窓に衝突を繰り返しているのを見たこともあります。ガラスがあって出入りできないことを理解できないんですね。たぶんオオコウモリは体の小さい同類に比べてレーダーの能力――あるいは敏捷性――が劣っていて、だからラホールの新型ビル――かつてない高い建物です――に激突して死んでしまったんでしょう。ニューヨークでは――マニラですら――ずっと前に絶滅してしまったんでしょうね。(20)

(22) 【【Mohsin Hamid, *The Reluctant Fundamentalist,* 2007『コウモリの見た夢』】

Night is deepening around us, and despite the lights above this market, your face is mostly in shadow. Let us, like the bats, exercise our other senses, since our eyes are of diminishing utility. (87)

バザールの灯りはともっていますが、夜も更けて、あなたのお顔はほとんど陰になっています。視覚は利かなくなっていきますから、コウモリみたいに、別の感覚を利用しましょう。といっても耳はもうくたびれはてているはずですよね。今度は舌を使いましょう味覚を楽しむのです。

(23) 【Mohsin Hamid, *Exit West.* Riverhead Books, 2017.藤井光訳『西への出口』、新潮社、2019 年】

Nadia and Saeed were, back then, always in possession of their phones. In their phones were antennas, and these antennas sniffed out an invisible world, as if by magic, a world that was all around them, and also nowhere, transporting them to places distant and near, and to places that had never been and would never be.

そのころ、ナディアとサイードはいつも携帯電話を持ち歩いていた。電話のなかにはアンテナがあり、まるで魔法のように、まわりのいたるところにありながらどこにもない、目には見えない世界を嗅ぎつけてくれて、遠くの場所や近くの場所に、それまでもそれからも存在しない場所にふたりを連れていってくれた。(32)

(24) 【Mohsin Hamid, *Exit West.*】　『西への出口』

But one day the signal to every mobile phone in the city simply vanished, turned off as if by flipping a switch. ・・・Deprived of the portals to each other and to the world provided by their mobile phones, and confined to apartments by the nighttime curfew, Nadia and Saeed, and their countless others, felt marooned and alone and much more afraid. (17)

だが、ある日、街のすべての電波があっさりと消え、携帯電話はスイッチを切ったように動かなくなった。・・・携帯電話が与えてくれていた、おたがいへの、そして世界への扉がなくなり、おたがいへの、そして世界への扉がなくなり、夜間外出禁止令によってそれぞれのアパートに閉じ込められ、ナディアとザイード、そして無数の人々は、孤島に置き去りにされたように感じ、さらなる恐怖を覚えた。(49)

(25) 【Mohsin Hamid, *Exit West.*】 『西への出口』

Neither of them had been to the other's office, so they didn't know where to reach one another during the day, and without their mobile phones and access to the internet there was no ready way for them to reestablish contact. It was as if they were bats that had lost the use of their and hence their ability to find things as they flew in the dark. (61)

ふたりとも相手が働くオフィスには行ったことがなかったので、日中にどこに行けば会えるのかが分からず、携帯電話もインターネットも使えなくなったいま、また連絡を取り合う方法はなかった。まるでコウモリが耳を使えなくなり、暗闇を飛び回りながら物を見つける能力を失ってしまったかのようだった。(50)

【引用・参考文献】

Abram, David. *Becoming Animal: An Earthly Cosmology.* Vintage Books, 2010.

――. *The Spell of the Sensuous: Perception and Language in a More-Than-Human World*, 1996. （結城正美訳『感応の呪文――〈人間以上の世界〉における知覚と言語』、水声社、2017 年）

Buell, Laurence. *The Environmental Imagination.* Cambridge: The Belknap Press of Harvard U P, 1995.

Hamid, Moshin. *Exist West.* Riverhead Books, 2017. （藤井光訳『西への出口』、新潮社、2019 年）

――. *The Reluctant Fundamentalist.* Penguin, 2007.（川上純子訳『コウモリの見た夢』、武田ランダムハウスジャパン、2011 年）

Snyder, Gary. *Mountains and Rivers Without End.* Counterpoint, 1996. （山里勝己訳『終わりなき山河』山と渓谷社、2002）

Thoreau, Henry David.　*Cape Cod*.　Ed. Joseph J. Moldenhauer. Princeton UP, 1988.

---. *Walden*. Ed. Lyndon Shanley. Princeton, New Jersey: Princeton UP, 1971.（酒本雅之訳『ウォールデン』筑摩書房, 2000）

伊藤詔子「アメリカン・ネイチャーライティングの起源を求めて」【スコット・スロヴィック・野田研一編著『アメリカ文学の〈自然〉を読む』ミネルヴァ書房、1996】

ギルガン、キャロル『もうひとつの声――男女の道徳観のちがいと女性のアイデンティティ』生田久美子監訳、川島書店、1986 年

篠原雅武『「人間以後」の哲学――人新世を生きる』 講談社、2020 年。

成田雅彦「エマソンと「透明」な大自然――「自然」に見る神秘主義的自然観の考察」『アメリカ』スコット・スロヴィック・野田研一編著『アメリカ文学の〈自然〉を読む』ミネルヴァ書房、1996

ネーゲル、トマス『コウモリであるとはどのようなことか』 永井均訳、勁草書房、1989 年。

ビュエル、ローレンス『環境批評の未来――環境危機と文学的想像力』 伊藤詔子他訳、音羽書房鶴見書店、2007 年。

モートン、ティモシー『自然なきエコロジー――来たるべき環境哲学に向けて』 篠原雅武訳、以文社、2018 年。

ユクスキュル、クリサート『生物から見た世界』 日高敏隆、羽田節子訳、岩波書店、2005 年。